



伝染病などについて

梅雨期になると、伝染病などの患者が増加して、衛生管理の必要性が叫ばれてくる。外出から帰ると、手を洗えとか、食物が変り易いから注意しようとか、蚊や蠅のいない生活環境をつくらう等々である。

伝染病はいつたい夏に多いのだから、またそのような

考えが果して誤っていないだろうか、このような観点に立つて本県統計課発行の県統計書から、数種の病種をピックアップして、これらの数表に若干の統計的手法を加え、その結果を再確認してみたいと思う。

1. 病種別の年・月別罹患数 (茨城県統計書より)

	赤痢・疫痢など					食中毒				
	30年	31年	32年	33年	34年	30年	31年	32年	33年	34年
計	2,258	1,500	1,956	1,570	1,594	408	143	248	158	493
1月	92	72	181	49	50	4	—	—	—	—
2	69	52	51	34	82	—	—	—	—	—
3	110	58	119	84	43	5	—	13	28	—
4	113	75	86	55	52	4	—	3	—	4
5	189	100	246	154	128	—	—	18	—	—
6	267	149	267	184	284	1	7	—	28	20
7	495	180	224	253	220	229	1	77	9	29
8	417	236	333	230	211	24	13	101	15	14
9	231	199	209	183	173	138	109	35	73	260
10	157	200	135	213	137	1	4	—	4	160
11	65	114	55	72	117	—	9	1	1	6
12	53	65	50	59	97	2	—	—	—	—

	腸チフス・パラチフス					麻疹				
	30	31	32	33	34	30	31	32	33	34
計	59	26	12	39	22	406	540	1,794	103	1,100
1	1	2	1	3	1	78	4	246	1	7
2	—	1	2	2	2	59	1	258	1	15
3	1	1	1	3	1	34	6	314	1	46
4	4	—	—	6	2	63	7	243	11	76
5	4	1	2	3	1	71	119	590	19	385
6	21	7	—	3	1	55	88	104	16	316
7	9	3	3	2	4	30	62	32	10	147
8	7	6	—	2	2	8	24	3	3	47
9	5	1	2	6	2	4	5	1	2	5
10	3	2	1	5	1	—	21	3	7	2
11	3	—	—	2	4	—	35	—	19	18
12	1	2	—	2	1	4	168	—	13	36

	日 本 脳 炎					結 核				
	30	31	32	33	34	30	31	32	33	34
計	126	149	68	70	25	6,691	7,173	7,245	7,894	7,889
1	—	—	—	—	—	358	516	553	544	499
2	—	—	—	—	—	432	455	462	575	579
3	—	—	—	—	—	462	603	522	574	575
4	—	—	—	—	—	605	566	571	677	595
5	—	—	—	1	—	741	605	677	710	578
6	—	1	3	2	1	617	646	607	774	730
7	1	2	4	3	5	761	597	661	782	770
8	33	11	8	16	2	690	767	664	738	734
9	74	112	26	40	16	597	654	608	688	664
10	11	22	22	7	1	484	599	679	635	805
11	7	1	5	1	—	490	599	629	632	685
12	—	—	—	—	—	454	566	612	565	675

2. 伝染病などの5カ年(昭30~34)における月別平均発生件数

(単位人)

病種別	月 別											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
赤痢・疫痢など	89	58	83	76	163	230	274	285	199	168	85	65
腸チフス・パラチフス	2	1	1	2	2	6	4	3	3	2	2	1
日本脳炎	—	—	—	—	0	1	3	14	54	13	3	—
食中毒	0	—	9	2	4	11	69	33	123	34	3	0
麻疹	67	67	80	80	237	116	56	18	3	7	14	44
結核	494	501	547	603	662	675	714	719	642	640	607	574

注 この表中0は単位に満たないものである。また—は罹患数がないものである。

この表は過去5年間(昭和30年~34年)の当該月の発生件数の平均値をあらわしたものであるが、この表でも解るように、腸チフス・パラチフスに比較して、赤痢・疫痢などの発生件数は非常に多くなっている。また赤痢・疫痢などのほか、食中毒・日本脳炎・麻疹などは、季節的に発生が変動しているが、結核などはその変動は殆ど見受けられない。

ここにあげた病種では、季節変動のいちぢるしいのは日本脳炎である。この病気は9月をピークとして、真夏の最盛期をややすぎた8・9・10月に多く発生し、気温の低い12・1・2・3・4月には発生していない。また結核のごときは、7・8月にやや多い発生件数を示すが、全体的にみて季節的な変動は、見受けられない。

3. 病種別年間変動の計算

イ 赤痢・疫痢など

月	x	y	x ²	xy	x ³	x ⁴	x ² y	理論値
1	-11	89	121	-979	-1,331	14,641	10,769	31.8
2	-9	58	81	-522	-729	6,561	4,698	64.8
3	-7	83	49	-581	-343	2,401	4,067	120.4
4	-5	76	25	-380	-125	625	1,900	163.4
5	-3	163	9	-489	-27	81	1,467	194.0
6	-1	230	1	-230	-1	1	230	212.0
7	1	274	1	274	1	1	274	217.6
8	3	285	9	855	27	81	2,565	210.8
9	5	199	25	995	125	625	4,975	191.4
10	7	168	49	1,176	343	2,401	8,232	159.6
11	9	85	81	765	729	6,561	6,885	115.2
12	11	65	121	715	1,331	14,641	7,865	58.4
Σ	0	1,775	572	1,599	0	48,620	53,927	—

$$a = \frac{\sum y \cdot \sum x^2 - n \cdot \sum x^2 y}{(\sum x^2)^2 - n \cdot \sum x^4} = \frac{1,775 \times 572 - 12 \times 53,927}{572^2 - 12 \times 48,620} = \frac{368,176}{-256,256} = -1.56$$

$$b = \frac{\sum xy}{\sum x^2} = \frac{1,599}{572} = 2.80$$

$$c = \frac{\sum x \cdot \sum x^3 y - \sum y \sum x^4}{(\sum x^2)^2 - n \cdot \sum x^4} = \frac{572 \times 53,927 - 1,775 \times 48,620}{572^2 - 12 \times 48,620} = \frac{-55,454,256}{-256,256} = 216.4$$

$$\therefore y = -1.56x^2 + 2.80x + 216.40$$

口 食 中 毒

月	x	y	x ²	xy	x ³	x ⁴	x ² y	理論値
3	-4	9	16	-36	-64	256	144	-15.0
4	-3	2	9	-6	-27	81	18	9.5
5	-2	4	4	-8	-8	16	16	28.5
6	-1	11	1	-11	-1	1	11	42.2
7	0	69	0	0	0	0	0	50.4
8	1	33	1	33	1	1	33	53.3
9	2	123	4	246	8	16	492	50.7
10	3	34	9	102	27	81	306	42.6
11	4	3	16	12	64	256	48	29.2
Σ	0	288	60	332	0	708	1,068	-

$$a = \frac{288 \times 60 - 9 \times 1,068}{60^2 - 9 \times 708} = -2.71$$

$$b = \frac{332}{60} = 5.53$$

$$c = \frac{60 \times 1,068 - 288 \times 708}{60^2 - 9 \times 708} = 50.44$$

$$\therefore y = -2.7x^2 + 5.8x + 50.4$$

八 日 本 脳 炎

月	x	y	x ²	xy	x ³	x ⁴	x ² y	理論値
6	-5	1	25	-5	-125	625	25	-7.5
7	-3	3	9	-9	-27	81	27	14.0
8	-1	14	1	-14	-1	1	14	25.9
9	1	54	1	54	1	1	54	28.1
10	3	13	9	39	27	81	117	20.8
11	5	3	25	15	125	625	75	3.9
Σ	0	88	70	80	0	1,414	312	-

$$a = \frac{88 \times 70 - 6 \times 312}{70^2 - 6 \times 1,414} = \frac{4,288}{-3,584} = -1.2$$

$$b = \frac{80}{70} = 1.14$$

$$c = \frac{70 \times 312 - 88 \times 1,414}{70^2 - 6 \times 1,414} = \frac{-102,592}{-3,584} = 28.2$$

$$\therefore y = -1.2x^2 + 1.14x + 28.2$$

ま し ん

$$a = \frac{\sum y \cdot \sum x^2 - n \cdot \sum x^2 y}{(\sum x^2)^2 - n \cdot \sum x^4} = \frac{789 \times 572 - 12 \times 16,173}{572^2 - 12 \times 48,620} \approx -1,003$$

$$b = \frac{\sum xy}{\sum x^2} = \frac{594}{572} \approx 1,038$$

$$c = \frac{\sum x^2 \cdot \sum x^2 y - \sum y \cdot \sum x^4}{(\sum x^2)^2 - n \cdot \sum x^4} = \frac{572 \times 16,173 - 789 \times 48,620}{572^2 - 12 \times 48,620} \approx 113,559$$

$$\therefore y = -x^2 + x + 113.6$$

ホ 結 核

$$a = \frac{789 \times 572 - 12 \times 16,173}{572^2} = \frac{737 \times 572 - 12 \times 31,865}{572^2 - 12 \times 48,620} \approx -0,149$$

$$b = \frac{291}{572} \approx 0,509$$

$$c = \frac{572 \times 31,865 - 737 \times 48,620}{572^2 - 12 \times 48,620} \approx 68,705$$

$$\therefore y = -0,15x^2 + 0,51x + 68,71$$

4. グラフに示した病種別の季節変動

この表は、3.病種別年間変動の計算を図示したものである。即ち月平均発生件数の変化に曲線をあてはめ、年間変動を標準化したものである。

赤痢・疫痢 については、冬期気温の低い時期には発生件数は低く、7月には最高の発生件数を示して、梅雨期からの3ヶ月間が圧倒的に多い。然し乍らこの病種は、低温の時期にも発生していることに注目すべきである。

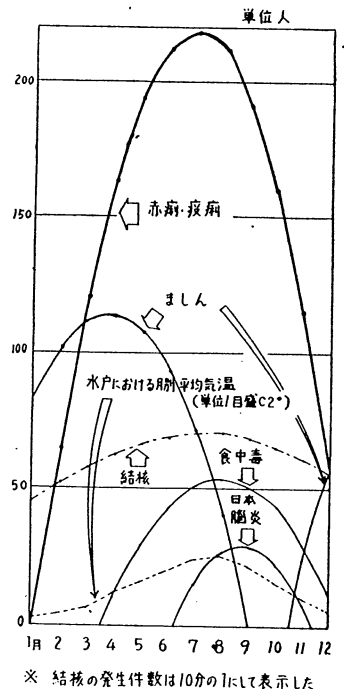
食中毒 の発生傾向としては、1, 2, 3月の冬期には発生をみないが、気温が上昇を示してくる4月より発生し、7, 8, 9月の真夏に最高を示している。これは多湿高温の状態が腐敗菌の繁殖に適し、食物が容易に変質してしまう結果からであろう。

日本脳炎 については、6月から11月までが、その発生時期となっているが、最高の発生を示しているのは、9月である。

高温期の後半から気温がやや下ってくる時期に脳炎の発生頻度が高く、12月以降から5月にかけて低温期には発生していない。

ましん については、空高く澄み渡つた秋冷の気候には、発生件数は最低を示し、寒さのくわわる12月より漸次発生件数が増加して5月は最高を示し、春から梅雨期に多い結果を示している。

結核 は、季節的に明瞭な変動はないが、気温の上昇に伴つて発生件数が上昇し、気温の低下に従つて緩やかに下降を示している。然し県全体としての月平均発生件数は500人前後であつて、この線を上下していることに注目すべきであろう。



【参考】 この項における傾向変動についての計算の詳細については、本誌「統計の断面」を参照されたい。
(解説・一本杉)



統計の断面 (其の3)

—傾向線について a—

前回は、平均値の問題として、統計集団の特性値としての平均値の不完全性を補う意味で、標準偏差 (standard deviation), 分散 (variance) について触れましたが平均値が、集団特性値の時点的平均値であるのに対し、時間的平均値として、傾向線の問題をここに考えてみたいと思います。

傾向線については、傾向変動を問題にする場合、移動平均法とか最小自乗法によつて示されます。ここでは最小自乗法による傾向線の計算方法とその問題点について若干述べたいと思います。

傾向線には、時系列的な各変量が、

- 1 直線的变化 (増加一方か、減少一方) を示す場合
- 2 二次曲線的变化 (凸曲線か凹曲線) を示す場合
- 3 一定の周期的变化を示す場合

この3つの外に、高次曲線の変化を示す場合が考えられますが、計算が複雑になる反面、利用価値が減少するので、以上の3つの場合を考慮して傾向線の計算をすれば通常は充分であろうと思います。

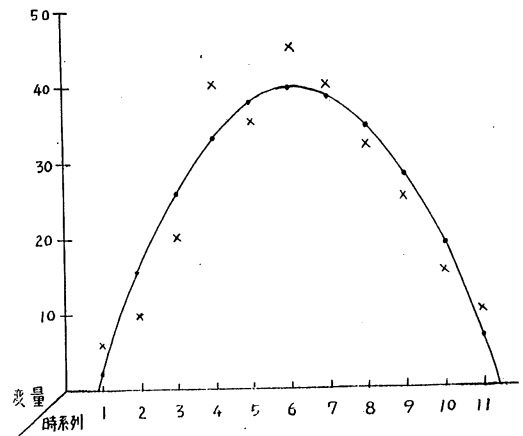
各々の算式については、各種の専門書に詳記されていますので具体的な計算例を示すことにしたいと思います。

例

次の数列について、傾向線を図上に画け。

6。10。20。40。35。45。40。32。25。15。10。

この数列の場合、図上に変量の位置 (図上の×印) をとると各数値の分布は、山型をなしていますから、二次曲線を充当せしめるのが最も適切な傾向線でありませう。従つて、次のごとき計算表によつてその理論値を算出します。(続)



註) ×印は変量の位置を示す

時系列	X	Y	X ²	XY	X ³	X ⁴	X ² Y	理論値	ε	ε ²
1	-5	6	25	-30	-125	625	150	2.2	3.8	14.44
2	-4	10	16	-40	-64	256	160	15.2	-5.2	27.04
3	-3	20	9	-60	-27	81	180	25.5	-5.5	30.25
4	-2	40	4	-80	-8	16	160	33.0	7.0	49.00
5	-1	35	1	-35	-1	1	35	37.6	-2.6	6.76
6	0	45	0	0	0	0	0	39.4	5.6	31.36
7	1	40	1	40	1	1	40	38.4	1.6	2.56
8	2	32	4	64	8	16	128	34.6	-2.6	6.76
9	3	25	9	75	27	81	225	27.9	-2.9	8.41
10	4	15	16	60	64	256	240	18.4	-3.4	11.56
11	5	10	25	50	125	625	250	6.3	3.7	13.69
Σ	S ₁ 0	S ₂ 278	S ₃ 110	S ₄ 44	S ₅ 0	S ₆ 1,958	S ₇ 1,568	—	Σε -0.5	Σε ² 201.83

※表頭Yの数列が与えられた数値です。

(一本杉 清)

県民経済と県民所得のはなし

横須賀 弘

私たちのくらしのしくみというものが、生産と消費のくりかえし、言いかえれば誰が物をどのくらい生産し、それによつてどのくらいの報酬が分配され、それが、どう支出されたかという経済の循環図によつて保たれている社会であるということができてでしょう。現在の資本主義経済では、生産は主として、資本をもっている企業で行われ、消費はもつぱら労働、土地、生産手段（資本）などを企業に提供する世帯によつて行われ、そして貨幣はこの生産と消費を結びつけるものであり、価格は生産や消費の活動の目安になる働きをもつものであります。

ところで、生産活動をいとなんでいる企業には、個人企業と会社企業といったように、いろいろなかたちのものがあり、その生産する商品の種類もちがつています。また大企業と小企業とでは、生産する商品の分量や金額もたいへんちがいますし、経済活動の大きさや、経済生活に及ぼす影響力もちがつています。したがつて、いろいろな企業を同列にみるわけにはいきませんが、この項ではいろいろな企業を一応同じ企業としてひとつにみることにしておきましょう。

つぎに、世帯は、会社や役所に勤めに出ている勤労者の世帯のほか、農家や商店、自分の家で家具や道具などをつくつている小さな製造業者などの小企業をいとなむ世帯をあわせれば、その数は企業の数よりもさらに大きなものになるでしょう。これらの小企業は、一方では企業でありますから、自分の家でものをつくつたり、売つたりして、得たもうけでくらしをたてているのですから同時にまた世帯でもあるわけです。このように、きわめて多数の企業と世帯が、県というしくみをもつ領域のもとで、生産と消費の関係のうちに、おたがいに密接に結びついてつくりあげた経済生活のしくみが、県民経済といわれるものであります。

企業と世帯は、企業と世帯のあいだについても、また企業相互のあいだについても、あるいは世帯相互のあいだについても、それぞれ密接な関係がありますが、表面では、個々の企業や世帯は一応独立した経済活動をいとなんでいます。そして、それぞれの企業は利潤をあげることを目的として生産活動をいとなんでいます。これに対し、世帯の消費活動の目的は、経済的欲望の充足であります。個々の企業の立場からいえば、販売する商品ができるだけ高く、そしてできるだけ多く売れ、また商品の生産や仕入れに要する費用ができるだけ少く、つまりもうけができるだけ多ければよいわけであります。これに対し世帯は出来るだけ多くの収入や所得をえて豊かな消費生活をいとなむことができればよいわけであります。

しかしながら、個々の企業や世帯、つまり経済単位の立場からすれば、それはいいわけではありますが、これを私たち県民の経済生活の土台である県民経済の立場からみるとどうということになるでしょう。

企業はできるだけ多くもうけることを目的としていますから、県または県民の立場からすれば、好ましくないような種類の事業であつても、ある事業をすれば、もうけが非常に多いような場合には、そこに多くの資本が集まり、その企業は盛んになるでしょう。これに対し、県民経済の立場からすれば、必要で盛んにしなければなら

ないような事業が、もうけの少ないために盛んにならないで、むしろ衰えるようなことも生ずるでしょう。

また、世帯についてみても、一部の人々は非常に豊かなのに、他方では大変貧乏な人々があり、さらに失業者が多いようなことも生ずるでありましょう。企業主だけが、沢山のわけまえをとり、労働者は少ししか支払いをうけないような場合も生ずるでありましょう。県にある資源が十分に合理的に活用されないために、県全体としての生産も雇用も生活水準もさつぱりあがらないこともあるでしょう。つまり、こういうわけで経済の問題を考える場合には、個々の企業や世帯の立場からだけでなく県民経済全体の立場ということがどうしても必要になつてきます。

そこで、この県民経済全体の立場にたつて考えるということは、どのような生産物が、どれだけの部門で生産されたか、もうけまたは所得はどの方面にどのよう配されたか、その分配は公平であつたかどうか、県民全体の生活水準は上つたかどうか、県民経済が能率的に動いているかどうかなどを調べるものであります。そしてまた、このような県民経済の活動に欠陥がある場合、その原因がどこにあるか、といったような観点に立つてその道具としてつくられたものが県民所得の統計であります。

県民所得統計は、県という立場からいろいろな手掛りとして利用されますが、それだけでなく、個々の企業の立場からも、県民のもうけはどれだけであつたか、県民の消費はどけだけであり、それがどの方面に向けられたかを知る一つのめやすにすることもできます。

ところで、県民所得の統計はどのようにしてこのような目的に役立つのでしょうか。それよりも、県民所得というのは、いつたいどういふものなのでしょう。

企業は、労働、土地、生産手段（資本）のいわゆる生産の3要素を組合わせて、財貨を生産するものですが、この場合、土地は自然によつて与えられたものであり、労働は人間の働きであり、生産手段（資本）は他の企業でつくられた設備、機械、原材料などでありました。また、土地は、それを所有する地主が提供するものであり労働は勤労者の提供するものであります。生産手段（資本）は、企業主が所有し使用するものであります。

この生産の3要素の内容やその組合わせの方法は、企業の種類によつて、とくにその企業が属する産業の種類にしたがつて、著しく異なることでしよう。いまこの生産の3要素をある時点でとらえ、県全体についてそれぞれ総計するとういふことになるのでしょうか。土地の合計はその県で利用されている土地の全部であり、労働の合計は勤労者が提供した全労働ということになり、また生産手段の合計はいわゆる県民資本とよばれるものになります。

土地は自然によつて与えられたものとみて、こたを一応別にしますと、県民資本こそは、県民の長い年月にわたる労働によつてつくりあげられ、貯えられたものであり、たとえば1年間における生産物は、この期間について県民資本と結びついて労働がつくりあげた成果であります。この成果が県民所得とよばれるものであります。

本県においても各年度毎に県民所得の推計を公表しておりますが、今後とも各方面の御協力を得てより精度の高い統計をえと育て上げてゆきたいと存じます。

(筆者は県統計課経済統計係長)

赤痢と気温

1 どうしてこのような図表としたか

赤痢という言葉を知ると多くの人は、はじめとした不愉快な梅雨とそれに続く暑い夏を思い出さるであろう。

この図表は風配図あるいは円形経過図表といわれるもので、もとはといえば気象関係で使われているものである。

これを統計では、統計値の時間的変化または季節的变化などをみる場合に使われるのもであり、例えば時刻別交通事故発生件数、月別伝染病発生件数、月別旅行者数などいろいろあげることが出来るが、これらは勿論線図表によつて表わし得るものであるけれども、この風配図の方がより季節的变化を明確にすることが出来、しかも絵画図表を画く場合にいろいろな図形と組合せるときに便利である。

2 作図にあたって注意したところ

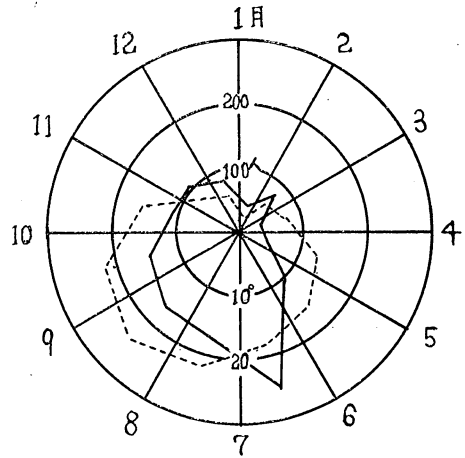
- (イ) 棒図表の0線はこの図表では円の中心点という位置になつており、目盛線は0を中心に3本通つてことになる。ここでは一つ目の目盛線で人員と温度を讀んでもらうことにした。
- (ロ) 棒図表の区画線にあたるものは、この図表では時計の文字盤を見立たよになつてゐる。
- (ハ) 折れ線であるが、ここでは赤痢発生件数を実線で平均気温を点線で表わしたが、風配図の場合折れ線の本数は3本ぐらゐまでが限度で、あまり多くなると見ぐるしくなる。線が1本のとき、線にかこまれた部分を斜線で模様をつけるとか、絵具で着色してみるのも面白いと思われる。
- (ニ) 範例をもうけないで、線のところに矢印で表示することも出来る。

3 この図表はなにを物語つているか

赤痢がかならずしも伝染病の代表としてよいかどうかは、いろいろと問題があると思われるが、今までの統計

をみると数字の上では他の伝染病にくらべはるかに多いので例としてとり上げたわけである。

この図表を見ると赤痢の発生状況は、12.1.2月の寒い時期には比較的少ないが、これが6月になると急に多くなつてゐる。このように6月頃に多くの発生を見るのは梅雨期にあたるため、温度は7月とくらへ多少低いのであるが、湿度が3、4月の73%から6月には86%と急上昇し極めて湿気の多い季節である。したがつてこの頃は蠅や蚊のような伝染病の媒介者には絶好の繁殖期でもあり、活動期でもある。それに加えて食べ物も腐敗し易いとあつて一層伝染病の蔓延を助長するものではないかと思われる。やはりこの図表をみると6、7、8月頃は特に伝染病の予防に注意する必要があることを私達に教えてくれる。



赤痢発生件数
県医草薙課

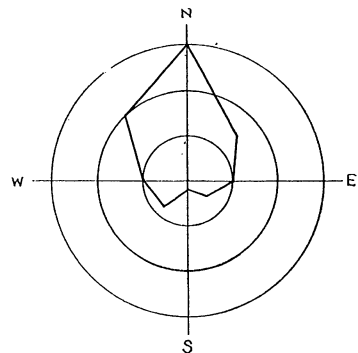
本庁の平均気温
本庁地方気象台

風配図について

測候所などで風向を表示するのに「風配図」というのを用いる。例えば筑波山で1日8回づつ観測した某月の1カ月間の観測結果が次のようになったとする。

風向	観測回数	百分率
北	72	30%
北東	36	15
東	24	10
南東	12	5
南	5	2
南西	19	8
西	24	10
北西	48	20

この表を図表化して風配図とする





ビジネス・シヨウ

一本杉 清

先頃、晴海埠頭の国際貿易センターで開かれたビジネス・シヨウを見学した。6月12日から18日までの開催期間の終りに近い17日、都バスを利用して、東京駅から東雲菟橋(しのめみやこぼし)行に乗り、雨に煙る風の強い晴海埠頭に降り立つた。Japan Machinery Show Centerという赤い乾板に白い文字の導標をあとに、商事機械を扱う各会社の、社旗の懸えるドーム型の大きな屋根の会館つまり国際貿易センター2号館に到着した。

このビジネス・シヨウは、社団法人日本事務能率協会ならびに東京商工会議所主催の第22回ビジネス・シヨウで、後援には、通産省・自治省・行政管理庁・東京都・日本生産性本部・日本電子工業振興協会・日本事務機械工業会といった名前がならんで、事務の能率化は先づ事務機構の機械化からと、かくは大規模のビジネス・シヨウとなつたのであろう。また開催の都度ビジネス・シヨウが雪だるま式に拡大して来たということは、単に主催者側の熱意ばかりでなく、それを必要とする受入側の需要拡大にも影響していることは当然である。

いささかビジネス・シヨウの広告めくが、更に内容は出品商社188社、展示品10,000点、総展示面積6,000平方メートル、あらゆる経営管理機械や器具を展示し、経営の近代化はまづ晴海埠頭からというわけである。

書記機械から複写・計算・金銭出納・電子計算・整理機械から連絡用・時間統制記録・運搬・包装・空気および色彩調節機の最新鋭機がずらりと展示されているのを見、そして各界からのバイヤーが或いは忙しそうに往来し、或いはセールスマンからの説明を熱心に聞いているところを見て、いささか羨望の感を抱いた。

若し過去のみを追う骨董品収集家であつて、かつ排他的イデオロギーが濃厚な鎖国政策の信奉者であるならば事務能率化の機械展存在の理由は薄弱であろうが、能率向上の為に日夜戦いを挑む人間頭脳の偉大さと、事務機械化の時流を今更のように認識させられた。機械化とか合理化という用語からの漠然とした何かが、鮮烈な感覚として印象づけられた。

事務管理機構の完全な状態というのは、その設備費の巨大な額に実現は中々に困難なことであろう。まして官庁機構は利潤追求の営利団体でもなく、市場競争の相手もない機関であり、マンモス化した機構の中に埋もれて時流に遊離した状態にあつても、殆ど直接の影響は受けなから、その実現は一層困難な状態にある。例えば、統計は行政に欠くことの出来ない重要性をもっているが統計について何らの認識を有してないものが、知事の統計は重要であるという一言をきくと、たちどころに統計は重要であるという態度に変わり、何故統計は重要であるかという一片の疑問をも、ひとかけらの知識をも吸収しようとしなくても一般商社のごとく直接ボーナスに影響はしない、ましてや集計機構の機械化など未来の宇宙時代の官庁機構ぐらいにしか考えないものが、われわれのまわりには、意外に多いのではないだろうか。

東京都庁を評して、バッテリー鶏舎を連想させるといつた友人がある。この言葉には、限られた空間を最大に利

用し、最小の空間から人間のもつ能力を最大に引きだそうとする、設計者の苦心の作に対して浴せられた最も痛烈な表現ではなろうか。バッテリー式東京都庁はまた東京都の縮図でもある。

行政上からは東京なるものを三つの面から眺める。即ち行政区域 Administrative Region としての東京、これは東京都である。また組織的区域 Nodal Region としての東京、即ち首都圏としての東京、もう一つは同質的区域 Homogeneous Region としての東京、いわば京浜地区である。これは東京の人口は?といつても、その東京が何れの区分に属する東京に該当するかで、その内容は異なつてくるからである。

しかしその取扱上の区分は判然としていても、その対象となる東京という市街地に目を転じて見ると、これはまた周知のとおり、雑然という語を象徴した模型の如くで問題のしようがない、最小の土地と最小の空間とを、最大に活用した人間生活が、埃と臭音との中で営まれていく。若し独逸人の如く企画性に富んだ民族であれば、アメリカ空軍によつて徹底的に爆撃され、余燼くすぶる中に、都市計画線は整然と劃かれておつたことであろう。60年版国際統計年鑑によれば、東京23区の人口は、ニューヨークに次いで、世界第二位を占める大都市であるが、都市という近代感覚の含む語句からは、凡そかけ離れた様相を呈し、隅田川は、地方の緑野を流れる清冽な川の概念からは、想像もつかないドブ川となり果てている。適切な都市行政であつたかどうかというよりも、その結果は合理性のない都市様相を呈していることは明瞭である。合理性がないから合理化が問題になり、能率的でないから能率化が叫ばれているのかも知れない。

事務管理機構を機械化して能率化を図れというのが、これは或いは非能率的事務機構であるからという前提にたつての話かも知れないが、従来事務屋の分担した領域を機械化し、その機械をコントロールするに若干の技術屋を充て、事務処理を高速化して所謂事務革新を行うべきだとビジネス・シヨウの主催者はいう。Cutting costs is our business, つまり事務処理に要する諸経費を下げることはまた、収益を上げることと同じだということである。それは当然のことであろう。然し機械力によつて能率化を図ることが能率的事務処理への最短距離ではあろうが、あなたがちビジネス・マシン・オンリーでもなろうかと思う。事務管理機構の改革には、先づそれに対処する人の問題がある。巨大な組織の中で、意欲的な心や、積極性を、すっかり削りとりられて、ただその日を大過なくすすす一見円満でありかつ又茫洋とした人格者になつてしまつた善良なサラリーマンに、一つには総て同率化した現在の給与体系にも問題があると思うが、1953年ソ連が第2次5カ年計画を完遂する原動力となつた一介の探炭夫スタハノフの労働に対する熱意の炎を、再びともすことが出来ないものだろうか。

ビジネス・シヨウは、ビジネス・マシンのシヨウであつて、ビジネス全般としてのシヨウ、つまりヒューマン・リレーションズを含んだビジネス・シヨウではなかつた。